

重症型顎関節症に対する関節円板切除・耳介軟骨移植に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15407

学位授与番号	医博乙第1360号
学位授与年月日	平成7年11月15日
氏名	高塚 茂行
学位論文題目	重症型顎関節症に対する関節円板切除・耳介軟骨移植に関する研究 I, 家兎を用いた移植実験での免疫組織学的検討 II, 臨床応用例での症状改善度について
論文審査委員	主査 教授 山本悦秀 副査 教授 富田勝郎 教授 中西功夫

内容の要旨及び審査の結果の要旨

顎関節症は顎運動時の開口障害、疼痛、関節雑音を主症状とする慢性疾患で近年、若い女性を中心に急増しており、社会的にも関心が高まっている。本疾患の病態像は、下顎頭と下顎窩の間に介在する関節円板の前方転位とその周囲組織の損傷とされており、またその主な治療法としては、ほとんどの症例で非観血的な保存療法が行われ、良好な成績が得られている。しかし、本症全体の約1%前後に相当する重症例では関節円板の癒着や穿孔などにより、整位が不可能なため関節円板が切除され、さらにその代用物質としての中挿入物の応用も検討されてきた。中でも自家組織には中挿入物として為害性がないことから近年その応用が検討され始めており、特に耳介軟骨は物性や形状が関節円板に近似しているため注目されている。そこで本研究では、耳介軟骨を用いる顎関節形成術について基礎的ならびに臨床的に検討した。

1. 基礎的検討：実験には家兎を用い、関節円板切除群（切除群）および関節円板切除+耳介軟骨移植群（移植群）の2群に分け、術後の免疫組織化学的变化を経時的に観察した。得られた結果は以下のように要約される。

(1)切除群では、術後早期より下顎頭関節軟骨の剥離・吸収が、また6週間より軟骨層の増殖修復がみられ、最終的には、線維軟骨により軟骨層は修復されたが、関節面は著しく平坦化していた。(2)一方、移植群では観察期間を通して下顎頭の形態ならびに関節軟骨層は、ほぼ正常に維持されていた。(3)また、免疫染色による軟骨細胞の増殖活性をPCNA (proliferating cell nuclear antigen) を用いて検索したところ、移植群においては術後2週のピークにおいてその陽性率は20%に留まり切除群のPCNA陽性率40%の約5割に抑制されていた。これらの結果より、耳介軟骨を関節円板切除後に応用すると、下顎頭の退行変性を抑制し得ることが示された。

2. 臨床応用：次に本実験結果に基づき臨床的に極めて重症であった5例に応用した。結果は術後2年以上経過時において、顎関節痛の消失ならびに最大開口量の増加を含む顎関節機能の著明な回復が認められた。

以上、本論文は関節円板切除後の顎関節に中挿入物として耳介軟骨を用いる方法について基礎的にその治癒経過を検討した上で臨床応用し、良好な成績を得られたことにより、顎関節外科学に寄与する価値ある労作と評価された。